

関係各位

京都府病虫害防除所長
(公 印 省 略)

病虫害発生予察情報について

下記のとおり発表しましたので送付します。

病 害 虫 発 生 予 報 第 2 号 (4 月)

予報の概要

作物名	病虫害名	予想発生量 < 平年比 (前年比) >
果 樹	カキクダアザミウマ (カキ) 黒斑病 (ナシ)	並 (並) 並 (並)
チ ャ	もち病 チャノホソガ カンザワハダニ	並 (山城 : 並) (丹波 : 少) 山城 <u>やや多</u> (並) 丹波 やや少 (やや少) 山城 <u>やや多</u> (やや多) 丹波 並 (並)
野 菜	コナガ (アブラナ科野菜) 菌核病 (キャベツ)	並 (並) <u>やや多</u> (やや多)

※平年とは過去10年の平均である。

■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■ 目次 ■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■■

予報の概要 1
予報 I 気象予報 2
 II 用語の定義 2
 III 予報本文 3
4月に注意すべきその他の病虫害 6

予 報

I 近畿地方 1 か月予報 (3月21日から4月20日までの天候見通し)

平成21年3月20日
大阪管区気象台発表

<予想される向こう1か月の天候>

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

天気は、数日の周期でかわるでしょう。期間の前半は平年に比べ曇りや雨または雪の日が多く、気温の変動が大きい見込みです。

向こう1か月の降水量は、太平洋側で平年並または少ない確率40%です。

週別の気温は、1週目は低い確率50%、2週目は平年並または低い確率ともに40%です。

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気 温	30	40	30
降 水 量	30	40	30
日本海側	30	40	30
太平洋側	40	40	20
日 照 時 間	40	30	30
日本海側	40	30	30
太平洋側	30	30	40

病虫害防除所では上記の天候の1か月予報の表現を「向こう1か月の気温は平年並、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または少なく、日照時間は平年並と予想されている。」としました。

II 用語の定義

1 半旬のとり方

	第1半旬	第2半旬	第3半旬	第4半旬	第5半旬	第6半旬
各月の	1～5日	6～10日	11～15日	16～20日	21～25日	26～最終日

2 発生量 — — — 病虫害の発生程度と広がり両面を加味したものをいう。

3 平年値 — — — 原則として過去10か年の平均とする。
データが10年に満たない場合は例年値とする。

4 平年値との比較

1) 時期

平年並	平年値を中心として前後2日以内
やや早い	平年値より3～5日早い
やや遅い	平年値より3～5日遅い
早い	平年値より6日以上早い
遅い	平年値より6日以上遅い

2) 量(発生量、発生面積等)

平年並	平年値並の発生で10年間に4回は発生する程度の普通の量
やや多い	「平年並」より発生が多く、10年間に2回程度の頻度で発生する量
やや少ない	「平年並」より発生が少なく、10年間に2回程度の頻度で発生する量
多い	「やや多い」より多く、10年間に1回程度しか発生しない量
少ない	「やや少ない」より少なく、10年間に1回程度しか発生しない量

Ⅲ 予報本文

果樹

1 カキクダアザミウマ（カキ）
予報内容 発生量：平年並（前年並）
予報の根拠 （１）前年秋期の被害果率は平年並。 （２）向こう１か月の気温は平年並、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または少ないと予想されている。
発生生態及び防除上注意すべき事項 （１）４月下旬頃に越冬場所から新芽に移って、展開後２～３日以内の新葉に寄生する。 （２）４月中下旬頃から新葉をよく観察し、新葉が出始めた日から１週間以内に防除を行う。
2 黒斑病（ナシ）
予報内容 発生量：平年並（前年並）
予報の根拠 （１）越冬罹病枝率は平年並。 （２）向こう１か月の気温は平年並、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または少ないと予想されている。
発生生態及び防除上注意すべき事項 （１）気温が高く、降雨日数が多い年は多発しやすい。 （２）受粉直後から新芽伸長期にかけての防除が重要である。

チャ

1 もち病
予報内容 発生量：平年並（山城：前年並 丹波：前年比少ない） 防除時期：萌芽～１葉期
予報の根拠 （１）前年秋期の発生量は平年並。 （２）向こう１か月の気温は平年並、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または少なく、日照時間は平年並と予想されている。
発生生態及び防除上注意すべき事項 （１）越冬芽に付着した胞子が３月下旬頃から発芽し始め、新芽の生育につれて若葉に感染する。 （２）雨が多く、じめじめした天候が続くと多発する。

(3) 昨年、秋期に多発した園では注意する。

2 チャノホソガ

予報内容 発生量：山城 平年比やや多い（前年並）
丹波 平年比やや少ない（前年比やや少ない）
防除時期：2葉期

予報の根拠

- (1) 前年10月の発生量は、山城で平年比やや多く（+）、丹波で平年比やや少ない（-）。
- (2) 向こう1か月の気温は平年並、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 蛹で越冬後、4月上旬～5月上旬に成虫が羽化し、新芽に産卵する。気温が高いと発生が早くなる。
- (2) ふ化した幼虫は新葉裏面の表皮下に食入し、成長すると葉を三角形に巻く。
- (3) 秋整枝をしなかった園や自然仕立て園では発生しやすい。
- (4) 巻葉内に堆積した虫糞により製茶品質が低下するので、摘採近くになって巻葉を生じた場合は速やかに摘採する。なお、摘採が遅くなる園では、幼虫の発生に十分注意する。

3 カンザワハダニ

予報内容 発生量：山城 平年比やや多い（前年比やや多い）
丹波 平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 3月下旬の調査では、発生量は山城で平年比やや多く（+）、丹波で平年並。
- (2) 向こう1か月の気温は平年並、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または少ない（+）と予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 気温が上昇し、暖かい晴れた日が続くと、急速に増殖する。
- (2) この時期の防除は重要であるが、必ず萌芽前に行う。

野菜

1 コナガ（アブラナ科野菜）

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

- (1) 3月下旬の調査（キャベツ）では、発生を認めなかった（平年並）。
- (2) 向こう1か月の気温は平年並、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平

年並または少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 雨が多いと発生が抑制される傾向がある。

2 菌核病（キャベツ）

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 3月下旬の調査では、発生量は平年比やや多い（+）。
(2) 向こう1か月の気温は平年並、降水量は日本海側で平年並、太平洋側で平年並または少ないと予想されている。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 春に発生が多く、適温は20℃前後、曇雨天が続いた時に発生しやすくなる。
(2) 発生終期に菌核が形成され土中に落ち、次の伝染源となる。菌核は土壤中で2～3年間生き残る。

4月に注意すべきその他の病害虫等

発生量を予報していない病害虫について発生生態及び防除上注意すべき事項を掲載しています。

イネ

1 苗立枯病

- (1) 病原菌の多くは土壌生息菌である。山土や水田土壌等を使用する場合は、床土のpHを4.5～5.0に調整し、は種前に粉剤の床土混和を必ず行う。
- (2) 低温多湿に経過するとピシウム属菌、高温多湿（特に出芽時）ではリゾープス属菌による苗立枯病が発生しやすくなる。育苗中の温度管理に注意し、出芽後は10～30℃の範囲で管理する。特に、トンネル育苗では外気の影響を受けやすいので、日中の高温や夜間の低温に注意する。
- (3) 出芽後はこまめに観察し、カビを認めれば直ちに薬剤防除する。菌の種類により効果のある薬剤が異なるので注意する。

2 もみ枯細菌病（苗腐敗症）

- (1) 病原細菌は種子伝染するため、塩水選ともみ枯細菌病に登録のある農薬を用いた種子消毒を必ず実施する。
- (2) 出芽時の温度は30℃を基準とする。ただし、加温しない育苗は10～30℃の範囲で管理する。
- (3) 発病苗を植付けると本田で腐敗し、欠株となるので、発病した苗箱の苗は使用せず処分する。

3 苗いもち

- (1) 種子伝染がいもち病の主要な伝染経路の一つであるため、健全な種子を用い塩水選と種子消毒を必ず行う。
- (2) 前年の稲わら、もみがらは有力な伝染源となるので、育苗場所の周辺には置かないようにする。

4 種子消毒について

- (1) 平成16、17年に**MBI-D剤耐性いもち病菌**が一部地域で確認された。耐性菌の頻度低下と拡大防止のため、健全な種子を用い塩水選と**種子消毒**を必ず行う。

MBI-D剤：カルプロパミド（商品名：ウィンなど）、ジクロシメット（商品名：デラウスなど）、フェノキサニル（商品名：アチーブなど）

- (2) 温湯消毒を行う場合は必ず乾粒を用い、処理温度と時間を厳守するとともに、処理後は速やかに水で冷却し、直ぐに浸種・催芽を行う。また各機種の使用上の注意事項を遵守する。

ムギ

1 赤かび病

- (1) 開花期から2週間以内に雨が多いと発病が多くなる。開花は出穂期からおおよそ1週間後である。防除最適期は開花初期～開花最盛期であり、防除を徹底する。

- (2) ほ場の水はけが悪いと生育・出穂が不揃いとなり、防除効果が低下しやすいので、出穂前にはほ場の排水を良くする。
- (3) 六条大麦は特に発生しやすい。
- (4) 赤かび病菌は人畜に作用性の強いカビ毒をつくる。

チャ

1 ミカントゲコナジラミ

ミカントゲコナジラミは、平成16年8月に国内で初めて、京都府においてチャへの寄生が確認され、分布が拡大している。平成20年10月下旬～11月上旬の調査では、府内各地で発生を確認し、多発園も認めた。

- (1) 成虫の発生
年に4回発生する。
- (2) 対策
農薬による防除適期は若齢幼虫期である。成虫発生期の散布では密度抑制効果が不十分であるため、成虫の飛翔が落ちついた頃を見計らって薬剤散布を行う。
- (3) 登録のある薬剤
 - ・ハチハチ乳剤（1,000倍、摘採14日前まで／1回）
 - ・アプロード水和剤（1,000倍、摘採14日前まで／2回以内）
 - ・アプロードエースフロアブル（1,000倍、摘採14日前まで／1回）
 - ・ダニゲッターフロアブル（2,000倍、摘採7日前まで／1回）

野菜

1 トマト黄化葉巻病とタバココナジラミ類

トマト黄化葉巻ウイルス（TYLCV: Tomato Yellow Leaf Curl Virus）の感染により引き起こされる病気であり、タバココナジラミ類によって媒介される。平成17年12月に府南部の抑制栽培トマトで発生が確認されて以降、最近では、平成20年11月に発生を確認しており、今後とも注意が必要である。

トマト黄化葉巻病の発生・拡大を防ぐためには、発生初期の発病株の抜き取りとタバココナジラミ類の防除を速やかに行い、「トマト黄化葉巻ウイルスの伝染環を絶つ」ことが重要である。

【施設栽培】

- (1) 黄色粘着板などを利用し、コナジラミの発生状況に注意する。
- (2) 先端部の葉が内側に巻いているもの、葉縁が黄化しているもの、株が萎縮しているものを認めた場合、関係機関と相談の上、発病が疑わしい株は速やかに土壌に埋める等、適正に処分する。

2 タバココナジラミ類

タバココナジラミ類は世界中に分布し、多くのバイオタイプ（形態的な区別が難しく、遺伝的、生物学的に異なる系統）が存在する。本州では在来系統（バイオタイプJpL）、バイオタイプB（従来のシルバーリーフコナジラミ）、バイオタイプQが確認されている。バイオタイプQは平成17年に国内で確認された侵入害虫で、発生確認後各地で発見されるようになった。

農業総合研究所と病害虫防除所が行ったコナジラミ類分布調査では、タバココナ

ジラミ類は京都府全域に発生し、特に夏以降発生が増加することがわかった。

平成17年にはバイオタイプQが府内で初めて山城地域で確認され、平成19年には福知山市まで発生地域が拡大した（平成19年11月6日付け防除所ニュース第14号参照）。また、平成20年10月の調査では、府内全域で発生を確認している。

本種は薬剤感受性が低く難防除害虫であるので、以下の3点を防除対策の基本事項として、防虫ネットや黄色粘着ロール及び農薬等を組み合わせた「総合的害虫管理」が有効となる。

- ・施設内にコナジラミを「入れない」。
 - (1) 開口部の防虫ネット被覆。
 - (2) 黄色粘着ロールの展張。
 - (3) 近紫外線カットフィルムの使用。
- ・施設内・施設周辺のコナジラミを「増やさない」。
 - (1) 発生初期の防除の徹底。
 - (2) 薬剤のローテーション防除の実施。
 - (3) 天敵や微生物農薬の有効利用。
- ・施設内からコナジラミを施設外に「出さない」。
 - (1) 開口部の防虫ネット被覆。

3 野菜苗の害虫類（ハモグリバエ類、アザミウマ類、コナジラミ類）

購入苗の使用に当たっては、害虫が寄生していないことを確認する。なお、ハモグリバエ類、アザミウマ類、コナジラミ類など、微小なものが多いので注意する。

※病害虫防除については、病害虫防除所・最寄りの農業改良普及センター又は農協にご相談ください。

詳しい農薬情報は、農林水産省ホームページの「農薬コーナー」の「農薬情報」をご覧ください。

ホームページアドレス http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/index.html

農業改良普及センター 電話番号一覧

・京都乙訓	農業改良普及センター	075-315-2906
・山城北	農業改良普及センター	0774-62-8686
・山城南	農業改良普及センター	0774-72-0237
・南丹	農業改良普及センター	0771-62-0665
・中丹東	農業改良普及センター	0773-42-2255
・中丹西	農業改良普及センター	0773-22-4901
・丹後	農業改良普及センター	0772-62-4308

農作物病害虫情報サービス

- ・テレホンサービス
0771-23-6442
- ・ホームページアドレス
<http://www.pref.kyoto.jp/byogai/>

京都府病害虫防除所

〒621-0806 京都府亀岡市余部町和久成9

TEL 0771-23-9512

FAX 0771-23-6539

－農薬の使用にあたっては使用基準を遵守すること－